作家略歴

井上　三綱（1899-1981）
福岡県八女郡（現・筑後市）出身。溝口竈門神社の神官を務める家に生まれ、1919年小倉師範学校卒業後、神奈川へ転居。各地の小学校で教鞭をとりながら坂本繁二郎に師事し絵を学ぶ。1926年第7回帝展に《牛》が入選。この頃東洋思想に傾倒し1946年から50年まで箱根の早雲寺に参禅。古代文化や中国の故事、文学をモチーフに、コラージュ、フロッタージュを併用したマチエールによる屏風装の大作を数多く発表した。1957年にサンパウロ・ビエンナーレほか、ニューヨーク近代美術館での国際水彩展に出品。

ピエール・アレシンスキー（1927-）
ベルギー・ブリュッセルに生まれる。1944年からラ・カンブル国立美術学校でタイポグラフィーとエッチングを学ぶ。1948年にベルギー現代美術賞を受賞後、1949年から2年間前衛美術集団「コブラ」の一員として活躍。その後、パリに移住。前衛書道家・森田子龍と交流を深め、自由闊達な筆の動きに影響を受ける。1955年に初来日。短編映画『日本の書』を制作。2016-2017年、Bunkamura ザ・ミュージアム、国立国際美術館で回顧展を開催。2018年高松宮殿下記念世界文化賞・絵画部門を受賞。

佐藤　多持（1919-2004）
東京府北多摩郡（現・国分寺市）に生まれる。1937年、東京美術学校日本画科に入学し結城素明に学ぶ。1940年、日本画院第2回展に初入選。1947年第1回旺玄会展に出品。1949年、第1回読売アンデパンダン展に日本画を出品。この年尾瀬にスケッチ旅行に出かけて群生する水芭蕉に感動、生涯取り組むモチーフとなる。1957年、知求会を結成。1961年から「水芭蕉曼荼羅」と題する連作を描き始める。1985年、翌86年に回顧展を開催。

山喜多　二郎太（1897-1965）
福岡県直方市で生まれる。1915年東京美術学校西洋画科に入学。1920年第2回帝展に卒業制作《子供》が初入選。以後連年出品・入選。1926年に中国に遊学。1929年第16回光風会展で会友、1934年会員に推される。1946年から本格的に水墨画に取り組む。西洋画の写実の基礎の上に南画のような流動的な筆遣いに特徴を持つ作品を発表。戦後は光風会理事、日展評議員も務める。筑前美術会、福岡美術会、福岡県美術協会にも所属し、地域の美術の発展にも尽力した。

ジャン・フォートリエ（1898-1964）
フランス・パリに生まれる。ロンドンのロイヤル・アカデミー及びスレイド美術学校で学ぶ。1924年に初個展を開き、1927年にパリのポール・ギヨーム画廊と契約。1934年から39年にかけ、制作を離れる。1945年、ルネ・ドルーアン画廊で開いた「人質」展が大きな反響を呼ぶ。1952年、批評家のミシェル・タピエに美術動向「アンフォルメル」の先駆として評価される。1960年、第30回ヴェネチア・ビエンナーレで大賞を受賞。翌年第7回東京ビエンナーレで大賞を受賞。1964年、大規模な回顧展を目前に没する。

アントニ・タピエス（1923-2012）
スペイン・バルセロナに生まれる。バルセロナ大学で法律を学ぶが、美術に転向。1948年前衛集団「ダウ・アル・セット」の結成に加わる。1950年代中盤より物質的で堅牢な絵画を制作しアンフォルメルの代表的作家とみなされる。1952年、第26回ヴェネチア・ビエンナーレに出品。1953年、第2回サンパウロ・ビエンナーレではグランプリを受賞。1979年バルセロナ市賞受賞。ベルリン美術アカデミーの名誉会員に選ばれる。1990年高松宮殿下記念世界文化賞・絵画部門を受賞。

渡辺　千尋（1944-2009）
長崎県出身。1963年に桑沢デザイン研究所に入所、朝倉摂に師事。1965年よりデザイン事務所でレコードジャケットや書籍の装丁等に携わる。1970年に画集『叛吐』（私家版）出版。1978年より銅版画制作を開始。1979年、第47回日本版画協会展奨励賞受賞。1996年から長崎・南島原市で16世紀に制作された銅版画《セビリアの聖母》復刻事業に関わり、2001年に著書『殉教（マルチル）の刻印』で小学館ノンフィクション賞優秀賞受賞。2007年、原爆爆心地問題に取り組んだ「グラウンド・ゼロ・モニュメント」試案を発表。

ベン・シャーン（1898-1969）
帝政ロシア領コヴノ（現・リトアニア）に生まれる。1906年にアメリカに移住。ニューヨークの石版画工房で徒弟修業をする。1930年代に不況下のニューヨークで社会の不正義に対し声を挙げた作品が反響を呼び、連邦政府の依頼による公共施設の壁画を多数制作。1946年から『タイム』など各誌でイラストレーションの仕事を始める。1954年、日本の漁船、第五福竜丸がビキニ環礁の水爆実験で被ばくした事件を受けて雑誌に描いた挿絵は代表作となる。

李　禹煥（1936-）
韓国・慶尚南道咸安郡に生まれる。国立ソウル大学校美術大学中退後に来日。1961年日本大学文学部哲学科卒業。1969年に論文「事物から存在へ」を発表し、美術運動「もの派」の理論的支柱となる。ガラスのひび、自然物、絵画の余白に他者性の現れを見出した作品を制作。1970年代初頭から線や点で構成する絵画シリーズを展開し、現在に至る。1990年韓国文化省より文化勲章花冠、1991年フランス文化省よりシュヴァリエ芸術文化勲章受章。2001年高松宮殿下記念世界文化賞・絵画部門を受賞。

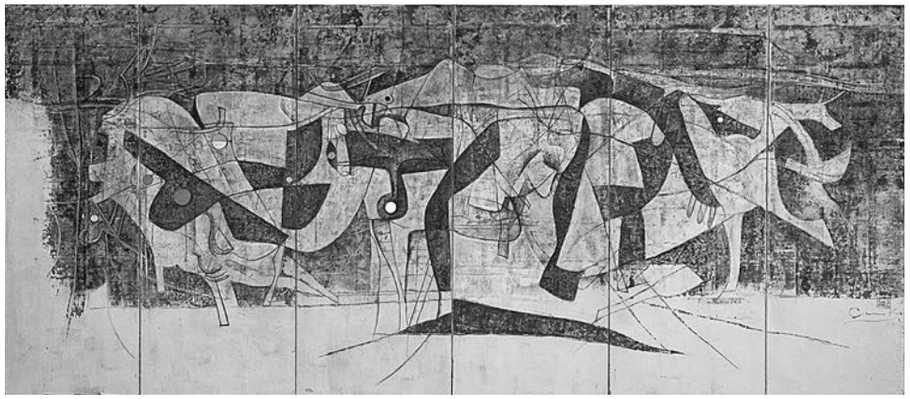
ヴォルス（1913-1951）
ドイツ・ベルリンに生まれる。1930年代に写真家ゲンヤ・ヨナスの下で写真術を学ぶ。1933年、兵役召集の通知を拒否したため独仏両政府から観察対象となり、パートナーとスペインのイビザ島に滞在。やがてパリに転居し、シュルレアリストの画家・詩人・演劇人と交流する。1938年頃から絵画制作を始め、戦時中の収容所生活の中で活発化する。戦後はジャン＝ポール・サルトルら文学者や詩人たちに認められ、彼らの著書に銅版画を寄せた。アルコール依存症に苦しむ中、38歳で没。

一本の線のためには…

For the Sake of a Single Line

会期　2022年8月24日 |水| –10月30日 |日|

会場　近現代美術室A



井上三綱《文字発生》1964年　紙本着色、六曲一隻屏風

ライナー・マリア・リルケによる小説『マルテの手記』には、「本当の詩は経験が書かせてくれる。だからたった一行の詩のために、たくさんの街を訪ねなければ。」という一節があります。画家が引く一本の線もまた、さまざまな経験の蓄積なのではないでしょうか。

震える線。迷いのない線。切り傷のような線。殴り書きのような線…。線には一つとして同じものがなく、描き手の創作活動、身体運動の軌跡を私達に伝えます。「線」に着目し、作品を読み解きます。

［学芸員　忠　あゆみ］

福岡市美術館
FUKUOKA ART MUSEUM
〒810–0051
福岡市中央区大濠公園1–6
TEL　092–714–6051（代表）
FAX　092–714–6071
www.fukuoka-art-museum.jp

作品リスト

※記載は、題名（日英）、制作年、技法・材質（日英）、画面寸法（縦×横cm）、寄贈情報、当館分類番号である。

1. 文字とイメージとの境界で

線が、文字とイメージとの境界を行き来していることがある。

井上三綱《文字発生》はその最たる例だ。ここには群れを成す牛のような生き物が描かれている。体の骨格や動きを抽出し、浮かび上がる線は、タイトル通り象形文字の誕生を想起させる。一方の《奥のほそ道》では、文字がイメージの一部を成している。松尾芭蕉『おくのほそ道』から引用された文字は夜空に輝く星のようであり、砂丘を思わせる地平と調和している。

ピエール・アレシンスキーも自然発生的な文字の在り方に関心を持った。《二人の語らい》に見られる勢いのある線は、画家の身体運動や時間の痕跡にも見える。本作が制作された頃、画家は日本の前衛書と出会い、大きな影響を受けていた。

井上　三綱　INOUE Sanko　（1899-1981）

1　文字発生

Generation of the Type
1964
紙本着色、六曲一隻屏風
colored pigment on paper, a six-fold screen
153.1×350.3
1983年　井上正子·井上晧子氏寄贈
1-B-115

2　奥の細道

Oku-no-Hosomichi
1968
貼紙、紙本墨画、六曲一双屏風
ink and paper on paper, a pair of six-fold screen
右隻：154.0×361.2
左隻：153.7×360.6
1983年　井上正子·井上晧子氏寄贈
1-B-117

ピエール・アレシンスキー　Pierre ALECHINSKY　（1927-）

3　二人の語らい

One Another
1959
油彩・画布
oil on canvas
119.0×99.5
3-A-409

2. 線の表情にみる画家の視点

画家がモチーフのどこに魅力を見出したのか、線の表情から読みとれることがある。山喜多二郎太は、同世代の画家たちがフランス留学することに反発し、中国の水墨画研究を行ったことで、油彩と水墨を融合させた線に到達した。農村を主題とした本作では、流動性の高い油絵具で山肌をなでるような線を描き、エネルギーに満ちた春の情景を表している。

佐藤多持は、1949年に友人に誘われ赴いた群馬・尾瀬で水芭蕉を目にしたことをきっかけに、ライフワークとしてこれを描き続けた。花の形態は次第に抽象化・デフォルメされていき《水芭曼荼羅》へと結実した。肥痩のある円弧の重なりからは、水芭蕉の花弁のもつ弾力や、群生する花のリズムに佐藤が魅了されたことがよくわかる。

山喜多　二郎太　YAMAKITA Jirota　（1897-1965）

4　田を耕す

Plowing a Rice Field
1957
油彩・画布
oil on canvas
70.9×94.2
1978年　山喜多次世志氏寄贈
1-A-167

佐藤　多持　SATO Tamotsu　（1919-2004）

5　水芭蕉曼陀羅　黄二十二

Skunk Cabbage Mandala, Yellow No. 22.
1971
紙本墨画金泥、六曲一隻屏風
ink and gold on paper, a six-fold screen
162.0×546.0
2-B-12

3. 刻み付けられた線

画材の摩擦や圧力によって刻まれる線は、ときに画家が負う傷の痕を想起させる。

ジャン・フォートリエとアントニ・タピエスは、共に戦争によって尊厳が脅かされる経験をした。フォートリエが厚塗りした画面に切るように刻む線に、私たちは絵具そのものの質感だけでなく、傷の痕を想起してまう。タピエスは、しばしば自作に十字のマークを描く。画家にとっては制作すること自体が「戦争体験、独裁政権への抗議の印」であり、十字は、自分の存在を刻み付けるための記号であったという。

渡辺千尋は、銅板に版画専用の刃であるビュランが触れる瞬間を「刺青師の緊張」に例えている。一度線を引き始めたら決して後戻りできないという制約が、渡辺作品のもつ緊迫感の秘密なのだ。

ジャン・フォートリエ　Jean FAUTRIER　（1898-1964）

6　直方体

Parallelepiped Rectangles
1959
油彩、紙・画布
oil and paper on canvas
60.0×92.2
3-A-4

アントニ・タピエス　Antoni TAPIES　（1923-2012）

7　書き方と二つの十字

Graphology and Two Crosses
1972
エッチング・紙
etching on paper
59.4×98.2
西本コレクション
16-E-1359

渡辺　千尋　WATANABE Chihiro　（1944-2009）

8　風の遺跡

Wind Ruins
1979
エングレーヴィング・紙
engraving on paper
29.4×36.1
2016年　渡辺紀子氏寄贈
1-E-998

4. 一本の線のためには…

ベン・シャーンは、移民としてアメリカに渡り、長年社会の片隅に目を向けてきた。ライナー・マリア・リルケによる小説『マルテの手記』に感銘を受けて発表した詩画集『一行の詩のためには…』で描かれたあたたかみのある人間像は、画家自身の経験に裏打ちされ、唯一無二のゆらぎを持つ。

李禹煥は、線や点を最小単位とする絵画作品を手掛けた。李は、自分の仕事は「修養と錬磨」の中で生まれるものと語り、一本の線を引いた時に画面上で起こる変化を観察しながら次の線を引いていった。

ヴォルスは、戦時中の収容所生活を期に、精力的に絵画を描いた。《題不詳》は心身を病んだ最晩年の作品群の一つ。線は微生物や植物の根毛のように蠢いており、描くことで自身の内に潜む生きる力を探り、表出しているようだ。

ベン・シャーン　Ben SHAHN　（1898-1969）

9　ライナー・マリア・リルケ
『マルテ・ローリッズ・ブリッゲの手記』より
「一行の詩のためには…」愛の多くの夜の思い出

For the Sake of Single Verse...: From the Notebooks by Malte Laurids Brigge, by Rainer Maria Rilke, Memories of Many Nights of Love
1968
リトグラフ・紙
lithograph on paper
57.4×45.2
3-E-81

李　禹煥　LEE Ufan　（1936-）

10　採石場の想い出 1

The Memory of Mine 1
1984
リトグラフ・紙
lithograph on paper
53.4×68.1
西本コレクション
16-E-1328

ヴォルス　WOLS　（1913-1951）

11　題不詳（いいようもなくやわらかな色彩）

Title Unknown
1949-51
グワッシュ・紙
gouache on paper
25.6×20.5
3-C-2